シリーズ・若者のひろば

― 若者たちの声のリレー ―

齋藤　真理亜

ブラックな時代
…辞めたいと思う気持ちと続けようと思う気持ち

大学生活の始まり１８歳

高校時代アルバイトをしていなかった私はどんなアルバイトをしようか悩んでいた。同じ理工学部に入学していた友達が「ファミレスにすれば？私もファミレスＤで働いているし、接客以外も学べるよ」と言ったので、地元のファミレスＲに履歴書を持っていき面接を受けた。奨学金で大学に入ったわけではなかったので、就職前の職業体験とお小遣いを自分で稼ごうと思っただけだったのだが、現実はそんなに甘くなかった。

面接で

店長は３０代で転勤してから２年目の人であった。面接をしたその日に「こんなにいい子が来てくれたのに、今採用しないと他のお店に採用されてしまうね。もう採用します！」と言われた。今考えてみれば、これが人手の足りない店ってことかぁってかなり思う。最初は優しい店長だったが、２週間したら豹変する。

採用されて

大学１年目は授業や補習がかなり多く、週１回と土日にバイトするのがやっとであった。それでも授業が遅くなり休む日があると、店長にかなり怒られた。怒り文句は「今仕事を覚える大事な時期なのだから、シフトが決められた日は必ず出なさい」であった。そう言われるとなぁ…遊ぶ予定ができてもバイトを優先するようになる。３か月研修を終えて、１人前として接客で出されるようになった。

1年経って

店長が転勤となり、２人目の店長になった。次の店長は４０代。同じ時期に料理長も変わり、ヤクザみたいな感じであった。２人とも機嫌にムラがあり、お客さんに気を配りつつ、店長と料理長の機嫌も取っていた。大学の授業数も減ったため、バイトが週４日に増える。

2年経って

３人目の店長は５０代。やさしいが２店舗掛け持ちで、あまり店にはいない。店長がいない日は私が店長代理（シフトリーダー）。「俺がいないときは頼むな」と言われ、発注、レジ管理、棚卸、お客様への謝罪をこなす。労働時間も１日１７時間になる日が出てくる。ちなみにお店は１９時間営業。開店を担当する日は３０分前にカギ開け、電気、機械スイッチオン、掃除、補充などなど…。閉店を担当する日は、お客様に閉店を促し、レジ締め、洗い物、モーニングメニューに取り換え、足りないものを引き継ぐメモ、電気機械スイッチオフ、掃除などなど…。夜中２時閉店で帰宅は３時。４時に風呂に入り、５時には大学に行くため電車に乗る。寝ないで通学する日もあった。毎月１日は閉店後棚卸のため、帰る時間がなく、そのまま客席のソファーで寝泊まりして大学に行った。営業時間以外は残業がつかないので、かなりサービス残業していた。１回だけ胃腸炎で休んだことがあったが、電話連絡すると休むことをかなり渋られ、何とか休みはもらったものの、次の日から１５時間勤務を３日間入れられた。「パートのおばちゃんは子供が熱だすと店が混んでいてもすぐ帰っちゃうのになぁ」とかなり理不尽に感じた。

3年経って

４人目の店長。３０代、また２店舗掛け持ち。

料理長は３人目。この料理長は離婚して家族がバラバラになり寂しがり屋であったが、店長がいなかったり人手が足りなかったりすると、料理を作ったあとすぐホールに出て、会計をしたり接客も手伝ってくれた。でも自分の労働時間は変わらず、月１５０時間以上の勤務で勤労学生となった。保険は入れなかった。常連のお客様がほぼ毎日いる私に「たくさん働いて大変ね。母子家庭で家計を支えているの？」と勘違いされ、可哀想に感じた私にお菓子や雑貨を下さる方が多かった。この年の３月に店舗の閉店も決まる。常連客以外の来客数はかなり少なく不安定であった。ちょうど大学４年で就職する年であったので、他のパート社員は次の勤め先を探していた。店長に「来年うちに就職する？もう何でもできるから、本社に推薦してあげてもいいよ」と言われたが「私は土日休みの会社に就職したい」と答えて、今の教師という道を選んだ。

料理長のセクハラ

料理長が一人暮らしで寂しいことを聞かされていた私は、可哀想に感じて誕生日にケーキを買ってバイトに行った。料理長にケーキをあげるとかなり喜び、ホールケーキを一人で全部食べてしまった。その日閉店担当で棚卸日だったため、夜中にチーフと棚卸業務をし、通学まで時間がなかったため、客室のソファで寝た。すると料理長が襲いかかってきた。「ケーキをあげたからって勘違いしないで下さい」と言ってタクシーに乗って逃げて帰ってきた。でもパートのおばちゃんに「勘違いさせるあんたも悪いよ」と怒られた。

今思えば…

同じ時間帯にシフトが入っていて急に来なくなった高校生がいたが、勤務がかなりきつく、希望の休みが通らなかったことが原因だと思う。どんなに店が混んでも決められた人数で接客をしなければならず、どんなハプニングがあってもその場にいるスタッフで対応しなければならなかった。年末年始、お盆休み、ゴールデンウィークは１５日連続勤務であった。勤めていた４年間でバイトを辞めたい、休みたいと思ったことは１００回以上あると思うが、料理を運ぶたびにお客様に「ありがとうね、おいしいね」と言われると、辞めようと思う気持ちはぐっと心の奥に引っ込んだ。サービス業はこのように、辛さよりもやりがいや喜びの気持ちで乗り越えられる人たちで運営されているように感じた。辛いバイト生活を励まし続けてくれたお客様には感謝してもしきれない。

ブラックの中に…

大学を卒業して勤めたところもまたブラック企業であった。残業代が支払われない、上司が責任を取らない、仕事の割り振りが平等にされていない。世の中みんなブラック企業ばかりなのかと本気で思う。でも、辞めたいかと言えばそうでもない。楽しくやりがいも感じる。愚痴を言い合える同僚もいる。取引先の方を大切に思える。仕事の中で嫌だと感じるところだけでなく、良いと感じるところが１つでも出てきたら頑張れる。もっと良くしようと思える。同僚みんなが同じモチベーションでいるわけではないが、少しでも同じ気持ちを持つ人がいたら、悩みや辛いところは共有し楽しいところは共感し、喜びや達成感を増やしていきたい。そうやって、仕事をしていくことがブラック企業を長く続けてこられた秘訣なのかもしれない。